

自由論題 4 中国政治の動態

報告 1

馬嘉嘉（立教大学大学院博士課程）

1970年代中国における腐敗と反腐敗—黒竜江省王守信横領事件をめぐって

1979年4月23日に、中国『人民日報』は黒竜江省賓県で起きた一件の横領事件について報道した。この横領事件は、「建国以来最大の横領事件」と言われており、1980年2月に主犯格である王守信（女、当時58歳）はハルビンで「横領罪」で処刑された。本稿は、この横領事件をめぐって、1970年代の中国の腐敗と反腐敗、それから、計画経済と腐敗の関係を解明するものである。

中国の腐敗についての研究は、改革開放以後のものが比較的多く、改革開放以前と関連する研究が少ない（Julia Kwong, 1997; Xiaobo Lü, 2000; 王伝利, 2004）。なお、事例のもとで行われた研究はほとんどない。本稿の主な内容は以下である。

まず、この「建国以来最大の横領事件」はどのような時代背景で如何にして暴露されたのか。腐敗を取り締まる主体や出発点が違くと、それが持つ意味合いが異なってくるわけである。また、当時このような横領事件の発生した原因をめぐって、異なる見方が出現していた。特に、作家・記者であった劉賓雁のルポ作品が主流の見方を沿わず、この事件を詳細に描いている。彼の作品の視点は当局のと比べてだいぶ違っており、当時国民に衝撃を与えて大騒ぎになっていた。よって、このルポ作品をめぐる攻防は激しく展開していた。本稿はこの攻防の中で示された反腐敗の限界を提示したい。最後、中国改革開放以前には計画経済の下で全ての計画・生産・流通・分配が、国の計画経済の管理システムに取り入れられており、このような厳密な管理システムのもとで、腐敗現象が少なかったという主張がある（王雲海、2003）。本当はそうなのか。本稿はこの事例を用いて計画経済と腐敗の関係を検討していく。

本稿は、今まで収集してきた資料のもとで、中国の腐敗と反腐敗に関する先行研究を参照しながら、以上の問題を答えることを試みる。